

農薬の登録内容は頻りに変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 指導販売課 072 (444) 8001



野菜

たまねぎ

◆施肥

早生種は1月中旬下旬が2回目の追肥の時期である。いずみの化成(8・8・8)で50〜70kg/10aを施す。

◆中耕除草

土を軟らかくし、肥大促進、品質向上を目的に、追肥時に中耕除草をする。その際、たまねぎの根はできるだけ切らないように軽く行う。

中耕後に除草剤を使用する場合は表1の薬剤を使用する。土壌処理除草剤の散布は、土壌が乾燥していると効果が劣るので、適度に湿っている時に行う。スズメノカタビラなどのイネ科雑草が多い場合には茎葉処理剤の効果が高い。

◆病害虫防除

べと病・白色疫病は、気候が温暖で雨が続くと発生しやすくなる。排水路を整え、過湿にならないように注意する。発生初期には表2の薬剤で防除を行う。



表1 たまねぎに登録がある主な除草剤

薬剤名	HRACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
トレファンサイド乳剤	3	200〜300ml/10a	100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(ただし収穫75日前まで)	2回以内
クロロIPC(クロロIPC乳剤)	23	200〜300ml/10a	70〜100ℓ/10a	全面土壌散布	定植活着後または中耕後(ただし収穫30日前まで)	2回以内
ゴーゴサン乳剤30	3	300〜500ml/10a	70〜100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(雑草発生前)(ただし収穫60日前まで)	1回
ホーネスト乳剤	1	75〜100ml/10a	100〜150ℓ/10a	雑草茎葉散布または全面散布	雑草生育期(イネ科雑草3〜5葉期)(ただし収穫14日前まで)	2回
セレクト乳剤	1	50〜75ml/10a	100ℓ/10a	雑草茎葉散布または全面散布	雑草生育期(イネ科雑草3〜5葉期)(ただし収穫21日前まで)	3回以内

※HRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表2 たまねぎの病害に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	病害名	希釈倍数	10a当たりの散布液量	使用時期	使用回数
リドミルゴールドMZ	M03、4	べと病、白色疫病	500〜1000倍	100〜300ℓ/10a	収穫7日前まで	3回以内
ビシロックフロアブル	U17	べと病	1000倍	100〜300ℓ/10a	収穫前日まで	3回以内

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 キャベツの菌核病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	10a当たりの散布液量	使用時期	使用回数
ベンレート水和剤	1	2000倍	100〜300ℓ/10a	収穫7日前まで	6回以内
ロブラール水和剤	2	1000倍	100〜300ℓ/10a	収穫7日前まで	4回以内

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

キャベツ

◆収穫

1〜2月は、松波を中心とした泉州キャベツの収穫最盛期を迎える。収穫が遅れると裂球するので、適期収穫に努める。

◆病害虫防除

雨による過湿条件が続くと菌核病が発生しやすいため、うね間の排水に注意するとともに、発生を認めたら、発病株をほ場の外に持ち出して処分する。薬剤防除については表3を参照し、適期防除に努める。



軟弱野菜の露地栽培

1月下旬から2月上旬は年間でも最も寒い時期となる。凍害等で品質が悪くなるのを防ぐため、必要に応じて、霜よけや保温資材(寒冷紗、不織布)を活用する。

- ① 1mm目の寒冷紗やバスライントなどの不織布のべたがけ
- ② 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ
- ③ 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ

トンネルがけ+不織布のべたがけ

ただし、被覆すると中の様子が見えにくくなり、病害虫の発生等に気づくのが遅れることも多いため、注意する。



果樹

果樹全般

◆樹勢の回復

近年、果樹全般に樹勢が低下している樹が増えている。樹勢の低下している園では、たこつぼ施肥による下層土壌の改良や、客土・堆きゅう肥の施用により、樹勢の回復を計画的に行うと良い。

◆せん定時の切り口のゆ合促進

せん定整枝時や病枝切除直後にできた太めの切り口には、ゆ合促進のため速やかにトップジンMペーストを原液で塗布する。

◆園内清掃

病害虫の発生を抑えるため、落ちた果実や枝葉は、園外で処分し、園の病原菌や害虫の卵、

幼虫、蛹、成虫の密度を下げておく。

みかん

◆越冬病害虫の防除

12月中旬〜1月上旬にハーベストオイル(60〜80倍/10a当たりの散布液量200〜700ℓ)を散布する。この散布により、ミカンハダニやカイガラムシ類の発生を抑えることができる。

ただし、ハーベストオイルは、油膜でダニ類を窒息させるため、葉裏まで丁寧に散布する必要がある。また、ハーベストオイルは樹を油膜で覆い、樹の呼吸を抑えるため、樹勢が弱った樹には3月中旬に80倍で散布すると良い。

◆中晩柑類の収穫と貯蔵

はっさく、ネーブル、清見、不知火(デコボン)等の中晩柑類の完熟期は2〜3月だが、袋かけ栽培をしないときは、凍害や寒風害による果皮障害の危険性がある。そこで、被害を受ける前の1月上旬までに収穫貯蔵して追熟させる。収穫後は風乾して果実重を3〜4%程度減少させる予定がある。

◆せん定

せん定は2月下旬頃までに、前年の結果枝基部の芽が欠けていないことを確認し、1〜2芽残すようにせん定をする。残す芽のすぐ上で切ると切り口が乾燥して亀裂が出来るので、新梢の伸びが悪くなるので、残す芽の少し上で切る。なお、若木で枝を長く残す場合は、登熟していない緑色の部分は切り落とすようにする。

また、生育期の風ずれによる傷口からの感染を防ぐため、防風ネットや防風垣を整備する。

もも

密植園では、日当たりを改善する意味で間伐を計画的に行う。また排水の悪い園では、溝切りや暗きょ排水等を行う。



◆土壌改良

もも園の土壌が中性近くからアルカリ性(PH6.5以上)になると、マンガン欠乏症が発生しやすく、生育不良や小玉果の原因になる。初期の症状は5月中旬頃から新梢の先端の葉色が薄くなり、葉の葉脈間の緑色が抜けて縞模様になる。

ももの根は、2月になると伸び始めるため、根を切る中耕や排水対策は1月中に行う。

◆せん孔細菌病対策

この時期は菌密度を下げて今年の発生を抑えるために、せん

いちじく

◆せん定

せん定は2月下旬頃までに、前年の結果枝基部の芽が欠けていないことを確認し、1〜2芽残すようにせん定をする。残す芽のすぐ上で切ると切り口が乾燥して亀裂が出来るので、新梢の伸びが悪くなるので、残す芽の少し上で切る。なお、若木で枝を長く残す場合は、登熟していない緑色の部分は切り落とすようにする。



*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/散布液量)を表示しています。